

## 「警官にすまない」

舟橋正夫

昭和五十五年六月十二日、大平総理は突然に全く突然に逝去された。私はこの日の朝、出社のためテレビの前で洋服を着ていた時に、逝去の報道を知ったのであるが、一瞬全身の血が止るようなショックを受けるとともに、正しく戦場における壮烈な戦死を想い浮かべた。

私は昭和十七年ガダルカナル島に上陸して悪戦苦闘していたのであるが、前進している時、隣にいた兵隊が直撃弾を受けて、バツタリと倒れて戦死した情景を想い出したのである。

選挙で自民党を勝利に導き安定政権を作り、一九八〇年代の輝かしい日本のために前進を開始されようとした総理が、直撃弾を受けてバツタリと倒れて戦死されたような気がしてならないのである。

私は大平会の会員でもあったし、二男の裕君が当社の社員であるということもあって、たいへんご多忙な総理にも親しくお話を承る機会があり、このことは私にとって本当に幸せな恵まれたことであつたと思つてゐる。

私が出席させていただいていた大平会は、総理が初めて衆院議員選挙に立候補される以前に、お亡くなりになつたキリンビールの高橋さん、元最高裁判事の松本さん、それに当社の元社長小泉さんのお三方が発起人となつて、若き日の大平さんを激励するためにお作りになつたものとうかがつてゐるが、本当に政治色のみじんもない、血の通つた暖かい会合であつた。

昭和五十三年十二月八日、この日は大平内閣が誕生した翌日であるが、たまたまその日は大平会の予定日とな

っていた。とてもご出席いただくわけにはいかないと思っていたが、ほとんど予定の時間に笑顔で会場へ入ってこられた時は本当に嬉しかった。常時出席する人は十名から十五名くらいの会合で、いつも総理は見るとに気楽そうにしておられたが、その日は本田弘敏さんが、感きわまって「王将」の歌をうたわれたのを覚えていた。総理になってもこの会には必ず出席しますといわれて、一同心から大喜びであった。

総理がたいへんな激職のなかでも健康でいらっしやるので、幹事長をしておられた時であったが、何か健康法をやっておられますかとお聞きしたことがある。その時しばらくお考えになって、「そうですね、朝、目が覚めた時、床のなかで手や足を動かしているが、それくらいのものかな」とおっしゃったことがある。健康法などということは暇人のやることもしれない。

ゴルフもお好きであったが、総理になられてからは回数も少なくなっていたようである。これはもちろんお忙しいということもあるだろうけれども、「ゴルフに行く」と車の走る沿道に警官がずっと立っているの、すまぬような気がして……」とおっしゃったことを想い出す。本当に真面目な、庶民的な素晴らしい宰相であったと思う。

私の会社の築地寮を会場とする十二日会というのがあった。この会は毎月十二日に行われているのであるが、総理はご都合がつけば、三十分間くらいでも顔を出していた。

たしか昭和五十四年の秋頃からだと思うが、日本料亭を敬遠されて会合は全部、ホテルのレストランをお使いになるほどになった。築地寮というのは、たいへん粗末なお座敷ではあったが、唯一の例外として、ここへお出で願ったわけであり、「二つして畳の上へ坐れるのも舟橋さんのお蔭です」と冗談まじりにおっしゃっていた。私は本当に心から親しみを感じることのできるやさしいお方であったと思う。

(古河電気工業社長)